

## 歌唱表現における意欲の高まりを図る指導の手立て ～日本の民謡におけるコブシの表現を通して～

廣富恵美子

鳥取大学附属中学校 音楽科

E-mail: hiroтоми@fuzoku.tottori-u.ac.jp

**Emiko HIROTOMI** (Tottori University Junior High School) : **Means for educational guidance to enhance student's motivation and enthusiasm in the singing expression. — An example of the expression of “kobushi” or tremolo in Japanese traditional folk songs**

**要旨** — 本校音楽科では、生徒が様々な音や音楽と対峙し、主体的にその音や音楽のよさや特質をとらえていく鑑賞活動のあり方と、鑑賞活動を通じて各自がとらえたことを、どのように表現活動に生かしていくかを研究している。本年度は、生徒が“コブシ”の感覚を身につけながら、より意欲的に民謡の歌唱表現に取り組む手立てについて考察する。

**キーワード** — 日本の民謡, ソーラン節, 中学校音楽, デジタル教科書

**Abstract** — The major research subject in the music department of our school, Tottori University Junior High School, is to find a better way in the management of “music appreciation activities” that evoke students' proactive attitude for listening various kinds of sound and music and students' ability to grasp the essence of the music. Another subject is how we exploit what each of students feel and understand through the appreciation activities to their expression activities. I will discuss the way to urge students to address better expression of singing of Japanese traditional folk songs together with gaining feeling of “kobushi” or tremolo.

**Key words** — Japanese folk song, Soranbushi, digital textbooks for junior high school, music education, teaching model plan

### 1. はじめに

#### 1.1. 問題の所在と研究のねらい

中学校学習指導要領<sup>1</sup>において音楽科の目標は「表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、音楽を愛好する心情を育てるとともに、音楽に対する感性を豊かにし、音楽活動の基礎的な能力を伸ばし、音楽文化についての理解を深め、豊かな情操を養う」である。また、その中で、「我が国や郷土の伝統音楽に対する理解を基盤として、我が国の音楽文化に愛着を持つとともに他国の音楽文化を尊重する態度などを養う観点から、学校や学年の段階に応じ、我が国や郷土の伝統音楽の指導が一層充実して行われるようにする」とある。

鳥取県を代表する民謡といえは一般的には「貝殻節」だが、鳥取大学鈴木准教授らの調査によると、鳥取県内の小学校は59.0%である

のに対し、中学校での「貝殻節」の実践例は23.0%と低く、その要因として、「授業時間数の不足」、「指導法が分からない」という回答も見られた<sup>2</sup>。

これまで本校では、指導者自身の「民謡ならではの発声方法で歌唱すること自信がない」「自分が模範を示せないという思い込み」「自身の指導法に自信がない」ことや、「生徒にとっては興味を持ちにくい題材ではないかという懸念」から、民謡を扱った授業の実践から遠ざかっていた。

そこで、一念発起し、「誰にでも実践できる授業」をめざし、扱う題材は本校で使用している教育芸術社の教科書に掲載されている「ソーラン節」とし、日本の民謡の歌唱に自信が無い、もしくは慣れていない教師でも、無理なく民謡の授業での表現活動を実践できる指導法の1例

として、デジタル教科書も活用することとした。

本研究の目的は、日本の民謡におけるコブシの表現を通して、生徒がコブシの感覚を身につけつつ、意欲的にコブシの歌唱に取り組む手立てを実践し、その効果を明らかにすることである。

## 1.2. 音楽科における「やりくり」のとらえ

本校音楽科では音楽活動の基本は、まっすぐな心を持って多様な音や音楽作品と対峙することであるととらえている。

聴覚機能を通して伝えられる「音や音楽」の世界の意味を知るためには、受け手である私たちが、まずはひたむきに、真摯に耳を傾けることから始める必要がある。その上で、音や音楽作品の美的側面（雰囲気・曲想・豊かさ・美しさなど）を感得することや、音楽を形づくっている諸要素（音色・リズム・速度・旋律・強弱・形式・拍の流れやフレーズ・和声を含む音と音とのかかわり合いなど）を感受するといった、活動へと進めることが必要であると考えている。

また、音楽の諸活動をする際の心の状態、ある目標にむかって取り組む中で、よりよい目標に向かって次にどうしたらいいのかを、すでに習得している知識や技能を用いて試行錯誤しながら取り組んでいる過程そのものが「やりくり」であるという定義で研究を行っており、近年は、楽曲を鑑賞して気がついたことを表現へといかす（つなげる）学習を中心に研究に取り組んできた。

生徒にとって、よりよいモデルとして、明確な完成形のモデル（プロの模範演奏）に触れることは、意欲の高まりを喚起し、歌唱活動に対する意欲につながり、よりより表現活動に向かって取り組んでいこうとする有効な手立てであると考えている。

## 1.3. 音楽科の取り組み

本校音楽科では「やりくり」の育成を通して、生徒が様々な音や音楽と対峙し、主体的にその音や音楽のよさや特質をとらえていく鑑賞活動のあり方と、鑑賞活動を通じて各自がとらえたことをどのように表現活動に生かしていくかを

研究しており、1時間単位の中で、どのような学習活動を中心として授業を構成し、どのように支援していけばいいのかを考えながら実践している。

この「やりくり」をしながら学習課題に取り組む経験を繰り返し行うことが、さらなる学習意欲へと有効につながり、生徒が持っている力が伸び、音楽に向きあう姿勢に良い変化が現われ、より主体的な学習活動を発展させることができると考えている。

より主体的な学習活動を繰り返し行っていくことで、思考したことを机上にとどめず、個々の表現活動につなげていけるよう取り組んでおり、鑑賞活動から表現活動への一連の流れは、常に意識して取り組んでいるものである。

## 2. 生徒の状況について

本校は附属小学校出身者と公立小学校出身者の割合が半々であり、小学校での学習経験にも差があること、生徒個によって音楽の得意分野や不得意分野がある状況は、多くの中学校と同じである。

入学して初めての授業を迎えた4月は、授業のオリエンテーションの後、校歌・応援歌の練習に取り組み、学級全体で声を出す活動の第1歩となる。まだ打ち解け切れていない状況で声を出すことに多少ならずともためらいが感じられる頃でもあり、教師には、生徒がのびのびと声を出して表現する環境作りも必要とされる。

### 2.1. 民謡を扱う授業をする際に配慮したこと

民謡を扱う授業の取りかかりとして、鳥取県の代表的な民謡「貝殻節」を鑑賞し、感じたことや気がついたことを意見交換する活動を設定した。その際、「貝殻節」の聴取経験を問うと、全体の3割程度の生徒は初めての聴取で、全体の7割程度の生徒は以前に聴取した経験があった。

小学校で民謡の授業を経験しているかどうか学校間で違いがあるので、日本の民謡の特徴を理解するところから授業を進めていくこととし、具体的には、「民謡ってどんなものか知っていること」を問う事をスタートとして授業を

進めていった。

次に、民謡には大きく4つのタイプ「仕事歌」「盆踊り歌」「座敷歌」「子守歌」があること（もちろん、これ以外のタイプがあることは言うまでもない。）、民謡の音階とその音階を元に作られている民謡の聴取、そして、民謡が生まれた背景となる文化・歴史などがあることをもって、教科書に記載されていることをもとに、確認を行った。

その後、教科書に掲載されている民謡の中から、他の生徒と重ならないように1つ選んで調べ、調べたことを学級内で発表し、その内容を全員で共有する活動を行った。

また、民謡のリズムに着目し、「拍にのったリズム（八木節様式）」と「拍のない自由なリズム（追分様式）」の民謡を聴き比べ、特徴を感じ取ることができるようにした。

教師が発声の方法を教えるだけでなく、どのような音色、どのような身体の使い方等によって声の特徴が表現できるのかを、模範演奏から生徒自らが気づくようにし、言葉の抑揚、アクセント、リズム、子音・母音の扱い、生徒自らがこれを生かして歌うための工夫をすることが大切であると考え、授業を計画した。

### 3. 中学校学習指導要領<sup>1</sup>での位置づけ

中学校学習指導要領<sup>1</sup>では、

第1学年

A表現

(1) イ 曲種に応じた発声により、言葉の特徴を生かして歌うこと。

(4) イ(イ)民謡、長唄などの我が国の伝統的な歌唱のうち、地域や学校、生徒の実態を考慮して、伝統的な声の特徴を感じ取れるもの

B鑑賞

(1)ア 音楽を形づくっている要素や構造と曲想とのかかわりを感じ取って聴き、言葉で説明するなどして、音楽のよさや美しさを味わうこと。

ウ 我が国や郷土の伝統的音楽及びアジア地域の諸民族の音楽の特徴から音楽の多様性を感じ取り、鑑賞すること。

内容の取扱いと指導上の配慮事項

(3) 我が国の伝統的な歌唱や和楽器の指導については、言葉と音楽の関係、姿勢や身体の使い方についても配慮すること。と位置付けられている。

### 4. 題材について

本題材としている民謡「ソーラン節」は、北海道の民謡で、仕事歌である。仕事歌であることから、もともとは無伴奏の力強い歌であったが、やがて陸に上がって三味線の伴奏などで歌われるようになった。

北海道では、江戸時代から昭和初期にかけてニシン漁が盛んであり、ニシン漁の時に歌われる仕事歌はその作業によって「船こぎ音頭」「網越し音頭」「沖揚げ音頭」等が歌われるが、その中の沖揚げ音頭が「ソーラン節」である。網揚げは大変な作業なので、船頭は、ヤン衆（ヤンチャが訛った言葉）と呼ばれる東北地方からの出稼ぎ労働者たちを鼓舞するためや、重労働の気分転換のためにこの歌を歌ったといわれている。

「ソーラン」は「ソラソラ」という催促の言葉から転じたもので、「ハイハイ」はその答えである。昭和38年に北海道の無形民俗文化財に指定されている。

### 5. 研究方法

1.1.でも述べているが、授業者自身がお手本を示すことに自信が無いため、音声や動画が収録されているデジタル教科書を活用し、実際の民謡歌手のお手本を見せ、音楽表現と合わせた日本の民謡の実践を試みることにした。

「ソーラン節」が生まれた背景や、労働の際に歌われていたことについて事前に紹介し、歌と人の生き方・ありかたを感じたり、歌は人を元気づける効果があることを再認識させることや、民謡の特徴的な歌い方の1つであるコブシに焦点を当てる。

同時に、日本の民謡にはなぜコブシがあるのだろうかという発問も同時に行うことで、生徒自らが、コブシの有用性に気づくことを期待する。

### 5.1. 研究方法の具体

民謡歌手のお手本を見ることで、生徒が興味を持ち、その興味がやってみようという気持ちにつながり、そこから、既存の知識や技能をやりくりしつつ、表現につながると考え、教育芸術社のデジタル教科書を使用し、その中に収録されている「コブシの説明」(伊藤多喜雄による)と「男声の模範演奏(伊藤多喜雄による)で旋律を4つに区切ってある歌唱動画」を使用し、伝統音楽の伝承方法である「模倣」と「繰り返し」を効果的に使用することを通して、無理なく歌唱活動に取り組めるように工夫した。

### 5.2. 授業構成と生徒の反応

授業では、まず「ソーラン節」を聴き、どんな歌い方だったかを考えた。生徒からは、「声を震わせて歌っていた」「ひとことひとことはっきり歌っていた」「伸ばしているのがはっきりわかった」という意見が出された。

生徒はコブシの特徴だけでなく、それ以外の民謡の歌唱法についても聞き取れていた。

次に、コブシとはどのようなものかを、コブシのある歌い方と無い歌い方を聞き比べる活動を行い、意見を出し合わせた。

比較して感じたことをワークシートに記入後、「コブシがないのはどんな感じだった?」との発問を行った際には、一斉に複数の生徒から勢いよく挙手があり、学習意欲の高まりが感じられた。以下が出された感想である。

コブシ無しについては、「コブシがあるのと比べると、弱々しくて、おもしろみがない。」「棒読みしているような感じ。」「子守歌を歌っているような感じ。」「温かい感じがした。」「ひ弱な感じがした。」などの感想が出された。

一方、コブシがあった方については、「力強く、堂々と、精一杯がんばって歌っている。」「力強さがある、重みがある感じ。」「棒読みと違って、凹凸のある感じ。」「迫力がある、心に残る感じ。」という感想が出され、「力強さ」「迫力」等、コブシの特徴を的確につかんでいると判断できた。

その次の段階として、コブシとはどんな歌い

方かを、デジタル教科書の解説により確認するとともに、絵譜を見ながら全体を歌い、その後、自分でつけやすい場所にコブシをつけて歌ってみる時間を設定した。

絵譜は、2016年に教育芸術社より出版されている、中学生の音楽1 指導書 研究編のワークシートを使用した。

コブシをつける活動を取り組みやすくするために、自分のやりやすい場所(1~2カ所)でコブシをつけるよう指示し、生徒の状況を観察し、必要に応じてコブシの解説を入れた。

絵譜を見ながら「ソーラン節」を聴き、微かな旋律の動きを聴き取らせ、微かな音程の変化を目で見て確認できるよう、プリントの絵譜を指でなぞるよう助言した。



絵譜を見ながら活動に取り組む生徒

「ソーラン節」の模範演奏を聴き、自分の歌唱と、模範演奏を比較し、よりよい表現に向かって、模範演奏をまねながら工夫を加えて歌うために、1カ所について複数回視聴した。

生徒Aに着目すると、コブシについては、「声を震わせる」という捉え方をしており、聞き比べでは、「全然違う」という風に答えているが、ワークシートにはコブシなしは、「音程が前の音と変わっていると、ひとつひとつが切れているよう」、ありの方では、「音程が前の音と変わっていても1つにつながっているよう」と答えている。

コブシの練習の過程では、「はじめは声を震わせれなかったけど、コブシがうまくできるコツをきいてやってみると少しできるようになっ

た。でも、コブシをつけるのは難しかったけど、やっているうちに楽しくなりました。民謡にはコブシは必要だなと思いました。」と振り返っている。

## 6. 結果と考察

デジタル教科書では、音源だけではわからない歌い手の表情や体の動きを感じ取ることができ、それが効果があった。

まず、「ソーラン節」の模範演奏を聴取し、どんな歌い方をしているのか気づかせた後に、生徒がコブシについて理解できるように、コブシがあるものとないものに聞き比べを行った。

その後「コブシが無いのはどんな感じだったか」という発問の際には、複数の生徒が勢いよく挙手し、学習への意欲の高まりを感じた。

その後、日本の民謡にふさわしい発声に気づき、表現方法を工夫して「ソーラン節」を歌うことができるようにするために、デジタル教科書の聴取によって、コブシはどんな歌い方か、デジタル教科書の模範演奏を聴取し、声や音楽の特徴を感じ取りながら、具体的な歌い方を知った。

その後、各自がアカペラでコブシの練習に取り組んだが、日本の民謡にふさわしい発声により、言葉の特性を生かしながら表現を工夫して「ソーラン節」を歌うようにするために、「ソーラン節」を少しずつ区切った模範演奏の聴取で聴くポイントを絞った。生徒たちはスクリーンに映し出されるデジタル教科書の画面を真剣に食い入るように見つめ、練習に集中し、自分の歌唱と模範演奏を交互に聞き比べながら、テンポよく各旋律を繰り返し練習に取り組んでいた。

その際、デジタル教科書で説明されていることを、平易な言葉に置き換え、教師の助言を加えるとともに、デジタル教科書では、模範演奏の他、曲全体の旋律を4つに分けた模範演奏を効果的に活用し、各旋律をテンポよく繰り返し練習できるように工夫した。

フレーズを区切ると、コブシを入れるポイントも絞れ、ダラダラとした活動になることを防

ぐことができた。

このようにデジタル教科書と教師の助言を交えて活動を進めたことにより、生徒たちはコブシの特徴もつかみながら、コブシに挑戦していた。

はじめは絵譜にかじりついていた生徒たちだったが、回数を重ねるごとに顔が上がる人数が増えていき、正面を向いて取り組む生徒が増えた。同時に声も次第に大きくなっていき、アカペラの活動と比較しても、声量が倍増した。活動内容への慣れと、完成形を見て、それに近づけたという生徒の意欲の高まりとの相乗効果もあり、できるようになったという実感がより得られていると考察できる。

また、デジタル教科書は興味のある部分だけ抜き出せる、場面の切り替えが素早くできるという利点もあった。

教師にとっては、自分の専門ではない分野の授業をする際には、準備に多くの時間を要し、結局自身のなさから尻込みしてしまい、授業に至らないこともあるが、デジタル教科書をうまく活用すれば、チャレンジしてみようという意欲につながる。

授業前と終了後に、2度に分けて行ったアンケート調査では、指導前（小学生のとき）には、18.8%の生徒が日本の民謡が好き、指導後（中学生のとき）には、50.0%の生徒が日本の民謡を聴くのが好きと回答した。

さらに、日本の民謡を歌うことに対して、65.6%の生徒が難しいと回答したが、94.0%の生徒にとって音楽デジタル教科書が歌う際に参考になったと肯定的な回答を示した。その理由としては、模範演奏を視聴覚的に見ることができ、理解しやすかった点を挙げている。

結果、歌えることコブシの表現にチャレンジすることは、楽しい。また、「歌えた」「できた」が、「楽しい」へと変化し、楽しいと答える生徒の割合が増加した。

授業での生徒の様子の変化や、授業後の感想から、歌唱表現における意欲の高まりを図る指導の手立てとして効果があったと考える。

＜授業後の生徒の感想＞

- コブシは難しかったです。素早く音を上下させられなかったけど、最後の方になるとできるようになったので良かったです。(男子A)
- 楽しかったです。同じコブシでも違う歌い方があるのかな？と思いました。まだ難しい所もあったので、うまくなりたいです。強調されていると印象づくし、力も伝わってきました。(女子A)
- コブシを入れるだけであんなに印象が変わるんだなと思いました。実際に歌ってみたら、楽しくて元気が出ることもわかりました。(女子B)
- 最初の方はコブシはプロの人しかできないと思っていたけど、してみると案外コツがつかめて楽しかったです。短時間でつかめるとは思いませんでした。(男子B)
- コブシがあったほうが頭の中にスッと入ってきて歌いやすかったです。それに、コブシありの方が気分が楽しくてリズムにのっていました。民謡の特徴は力強くいきいきとして声をよく震わせたりすることだと思いました。(女子C)
- はじめはコブシは難しかったけど、みんなとやっているうちにとても楽しくなりました。民謡にはコブシは必要だなと思いました。(女子D)
- コブシをつける理由がよくわかりました。前より歌うのがおもしろく感じました。(男子C)
- はじめはコブシがあるのとないのとあまり何も思わなかったけど、実際に歌って練習をしてみて、コブシがある方が力強く感じました。なぜかはわからないけれどコブシがある方が民謡の感じがしました。(女子E)
- コブシがあるのとないのとでは曲に対する印象がまったく変わってくるのがわかりました。音程の揺れを一瞬で表現するのは難しいですが、ゆっくり歌えば私でもできるかな？

と思いました。日本の民謡の特徴であるコブシは感情を強く込められるのだと思います。(女子F)

おわりに

今年度も鳥取大学の鈴木慎一郎准教授に多大なご助言と示唆をいただき、また、デジタル教科書の使用に関してもご協力をいただいた。深くお礼と感謝を申し上げます。

付記

本実践の一部は鈴木慎一郎・廣富恵美子(2018 印刷中)中学校における音楽デジタル教科書を活用した日本の民謡の指導法開発 - 《ソーラン節》を通して - 地域学論集 鳥取大学地域学部紀要. 2018, 14 (2), (受理済み) に投稿している

引用・参考文献

- 1 文部科学省「中学校学習指導要領 解説 音楽編」平成20年6月
- 2 太田綾香・大谷美佳・宮脇可南子・安田彩花・鈴木慎一郎「鳥取市の学校教育における《貝殻節》の教育実践に関するアンケート調査報告」『地域教育学研究』7巻1号, 鳥取大学地域学部, 2015年, 72-77 pp.
- ・吉川英史監修「邦楽百科事典 雅楽から民謡まで」音楽之友社 1984年
- ・榊原帰逸著「日本民謡大鑑 上・下」西田書店 1985年
- ・長田暁二, 千藤幸蔵著「日本民謡事典」全音楽譜出版社 2012年
- ・今井康人「デジタル教科書の現状と今後: 音楽科のデジタル教材活用を中心に」『音楽教育実践ジャーナル』vol.11, no.2 (通巻22号), 日本音楽教育学会, 2014年, 16 pp.